

はしがき

本書の執筆者は、それぞれに異なる関心をもち、専門とする研究分野もさまざまである。しかし、共有しているものが1つある。それは、日本の社会において、今日、環境教育はその本来の役割を果たすものになっているのかという根本的な疑問である。また、環境教育は本来、この程度のものにとどまる取り組みではないだろうという思いでもある。それは、根底から環境教育というものを見直し、いま求められる社会の課題に対応できる内容のあるものとして、また、私たちの生き方や生きる意味をも問うことのできるじゅうぶんな深さをもつものとして、これが実践される必要があるという思いにほかならない。本書では、それぞれの立場や関心に基づきながらも、この同じ1つの思いに向けた考察が展開され提言が打ち出されている。

環境教育の取り組みは、さまざまな場でさまざまな意図や目的をもってさまざまな人々を対象にして行われ、またさまざまな立場にある人びとによって担われてきた。それは否定的にではなく、肯定的に高く評価されるべきことである。具体的には、環境美化教育、野外活動教育から、自然保護教育、資源保全教育、さらには国際理解教育、多文化共生教育まで、じつにさまざまな教育活動が「環境教育」の枠組みのなかで実践されている。

しかし、そのいっぽうで、今日、「持続可能な社会の実現」という課題が広く地球社会に共有されるものになっていることにも目を向けたい。環境教育はこの現代の重要課題と無縁でいることはできない。実際のところ、環境教育を代替する用語として、「持続可能な発展（開発）のための教育（ESD）」、あるいは「持続可能性のための教育、持続可能性に向けての教育（EFS）」といった呼称も生み出され、よく耳にもする。

ここに環境教育にかかわるきわめて重要な問題を見いだすことができる。それは、この「持続可能な社会の実現」ということの意味を正面から真摯に受け止めるとき、これまで日本において行われてきた環境教育の取り組みはほとんど

うにこの課題に正面から向き合うことのできるものになっていたのかという疑問である。本書では、これまで「環境教育」だと思われて実践されてきた取り組みの多くを統一して、〈環境教育〉とカギカッコ付きで書くことにするが、その〈環境教育〉は、的外れとはいわないまでも、きわめて不十分な段階にとどまっていたのではないか。そして、「持続可能な社会の実現」という課題に意味のあるかたちで応えられるものになるためには、本来の意味での環境教育は、根底から見直され、あらたな発想や価値に基づくものになる必要があるのではないか。これが本書の基調となる問題意識であり問いである。

これまで日本において実践されてきた〈環境教育〉が、持続可能な社会の実現という重大な課題の達成に意味のあるかたちで貢献できる環境教育になるためには、さまざまな変革が求められることになるだろう。そして、この変革の内容や形態は、さまざまな角度からそれぞれに異なる関心や価値に基づいて考察・検討することができるだろう。

本書では、本論8章を第Ⅰ部、第Ⅱ部と大きく2つのパートに分けた。そして、以下に述べる2つの大きなテーマに沿って、環境教育の可能性を肯定的に大きく捉え、そうした可能性を実現するものとして環境教育が実践されていくうえで課題となることを個々具体的に検討していくことにした。なお、本論のまえに置かれた序章では、環境教育の歴史的な展開を概観し、〈環境教育〉の出自をさぐることでその限界と問題を明らかにすることを試みる。

本論の第Ⅰ部では、環境教育が不可欠の要素としてもたなければならない社会性や政治性といった要素に着目した4つの章を通じて、環境教育が「ラディカル」であらねばならないということ、すなわち根底からの社会変革という観点に立脚したものでなければならないということの意味を明らかにする。本書の前半にあたるこれら4つの章は、

- 第1章 環境思想の成果もふまえて環境教育がもつべき「ラディカル」ということの意味を明らかにするなかで「底抜き」の概念を提出する、
- 第2章 日本の環境教育の原点に位置する公害教育がもつ現代的な意味を、社会批判力と地域創造力を軸に実践事例も踏まえ未来に向けて考える、
- 第3章 開発教育を歴史的に振り返り教育における価値にかかわる論点を整

理し、〈開発教育〉ではない開発教育のあり方を学校教育の文脈で考える、

第4章 原子力発電所の苛酷事故を受け、環境教育の社会批判性を問い、社会的公正という視点を取り込むことが不可欠であることを明らかにすることをそれぞれ目的にしている。この第Ⅰ部をつうじ、脱政治化、脱社会化の著しい〈環境教育〉の限界や問題を明らかにし、時代の要請である持続可能な社会の構築につながる環境教育を支える理念となるべきものを考えていく。

これにつづく本論の第Ⅱ部では、これと同じく4つの章で構成し、「生きること」の意味を人間存在のあり方を深く問うことを通じて明らかにし、環境教育がもつ存在論的なレベルでの可能性を追究する。環境教育というものは、たとえば、「自然を守る」「環境を保全する」といったいわば目前の課題への取り組みにとどまることなく、究極的には、私たち1人ひとりの「生きること」の意味にごまかしのないかたちで向き合うものになっていかねば、その本来の可能性を実現できないであろう。本書後半に置かれる4つの章は、

- 第5章 「森のようちえん」の実践をふまえ、〈環境教育〉の計画性を超えて広がる「詩的に住まう」生きかたに基づく環境教育の構想を提出する、
- 第6章 教育や労働とは異なる原理に根ざす「遊び」の本質を明らかにし、人間と他者としての環境とのかかわりを環境教育の文脈で考える、
- 第7章 児童文学『モモ』に依拠し、合理化と効率化に向かう未来優位の意識でなく「いまを生きること」の豊かさに基づく環境教育の可能性を示す、
- 第8章 他者を支配しようとし「無為」から立ち現れる「共に在る」存在様式の豊かさをともに問うことから環境教育のオルタナティブをさぐることをそれぞれ意図している。この第Ⅱ部をつうじて、結局のところ、環境教育は、生きることの本源的な次元にまで迫る問題意識なくしては、対症療法的・彌縫策的なものにとどまるものにしかかなりえず、また豊かさというプラスの価値に基づく前向きなものにはなりえないことを明らかにしたい。

なお、本論のあとに置かれた終章では、本書で検討した環境教育の構想のなかに各章を位置づけ、今後の展望を示す。